

【用語】鼻紙—鼻汁を拭う紙、ふところ紙 丈長—和紙の名、奉書紙の類、紙質が厚い 青銅—銭の異称 鳥目—銭の異称、穴あき銭のこととで一疋が一〇文

【解説】江戸時代の庶民、とりわけ有力な農家や商人は、交際の度合いに応じて慶弔や見舞いの挨拶を義理がたく行うのが一般的であった。そのため後日になって同様な事態が生じた場合、相応の返礼をしなければならなかったため、各家々ではそれを記録しておく必要性が多分にあった。これは音信帳いんしんと称され、現在にいたるまで保管されていることが多い。

この文書は邑楽郡古海村(大泉町)の高野家に伝わる天保六年(一八三五)の婚礼祝儀帳である。これによって同家の交際の範囲や婚姻の際の贈答品の種類などを知ることができる。江戸時代の庶民生活の一端を知る手がかりをつかむこともできる。祝儀で多いものは金・鳥目(銭)・銀などの貨幣であり、また半紙・鼻紙・おしろい・扇子などの物品も記されている。交際の範囲は、古海村以外に舞木村(千代田町)、小泉村(大泉町)、福島村(千代田町)、五十部村(栃木県足利市)、間々田村(埼玉県妻沼町)などの人々の名前が出てくる。